つくしだより　2026 年 5 月号より

躍動するいのちの季節

＜今月の聖句＞　「これは、主がなさったことで、
わたしたちの目には不思議に見える。」
（マルコによる福音書 12 章 10～11 節）

西側の門に向かうゆるい坂をのぼっていると、保育園を包み込むように
どっしりとした、醍醐山がそびえる。
特にこの季節、常緑のなかにところどころ新緑が輝きいでて
芽生えるいのちの力強さと希望に、心が励まされる。
ふもとに広がるつくしの園庭でも、たくさんのいのちが躍動している。

昨秋に新調した木のアーチには早くもモッコウバラがつたい始めた。
工事のため涙を呑んでばっさり切ったはずなのに、早くも
あたたかい黄色の花々がヒノキの香りを楽しむように
上へ上へと勢いよく咲きゆく様子に、子どもたちの成長を
重ね見る。

アーチをぬけたかたわらには、みんなでいのちを育む、畑が待つ。
６００年の伝統をもつ久御山の淀苗を今年も調達し、一緒に植えた。
なすびにトマト、おくらにキュウリ、万願寺トウガラシ…
さらには、秋に焼き芋が待ち遠しい、紅あずまの苗も一本一本
こどもたちが手植えしてくれた。
その後の断続的な雨が土をゆたかに潤して、おいしい実りになあれ！

と思っていた矢先、誰だ？　せっかく植えたのに！
畑のひと畝、それもやわらかいアスパラが植わったところが早朝、
無残にも掘り返されている。なんてことを！！
翌朝、「“犯人”がつかまったよ～」と伝える声。
カゴの中から、観念したように、愛くるしく
上目遣いでこっちを見ているその犯人とは…。
ア・ナ・グ・マ。（やっぱり）。
日本固有種は捕獲しても
責任をもって逃がさねばならない決まり。

「ごめんね」と思いつつ自転車の荷台にカゴを括りつけ、炭山まで
ジテンシャを劇漕ぎする園長に、町内のあの人この人が笑顔で手を
振ってくれていた（はずかしい…）。

（つくし保育園園長　つだかずお）